2016年10月23日

ローマ 9:1-19

説教: Joseph Totsis

翻訳: Shoko Otera

それでは、ローマ人への手紙9章を開け、神の御言葉の旅を続けましょう。
これまでのことを少し思い出しましょう。1章18節から3章20節で　使徒パウロは神の怒りについて話しました。
それは　例外なく全ての人間が犯す罪　に対する裁きのことです。
これは　悪い知らせでした。
けれども、3章21節から8章の最後にかけて　私たちは良い知らせ、神の恵みについて学びました。それは　イエスキリストを信じるなら　完全に正しい者とし、罪を許そうという申し出です。
パウロは8章で　次のことを勝ち誇って宣言しました。
ローマ書8:1. こういうわけで　今やキリストイエスにある者は　罪に定められることがない。
同じく28節。神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを　私たちは知っている。
37節. しかし、私たちを愛してくださったかたによって、私たちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。
そして最後に、38ー39節。何ものも、私たちの主キリストイエスにおける神の愛から　私たちを引き離すことはできないのである。
なんと素晴らしいことでしょう！神をほめたたえます！
…でも、ちょっと待ってください。でも…私たちが大切に思っている人たち、私たちが愛している人たち、彼らはどうなるのでしょう？
ヨハネの黙示録10章には　御使いがヨハネに　「その小さな巻物を取って食べなさい、それは楽しいけれども苦しい経験となるでしょう」と言う箇所があります。
では、ヨハネの反応はどうでしょうか？

黙示録 **10:10** そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。

私たちが　聖書と呼ばれるこの小さな本に記された　福音のメッセージを聞き始める時、それはまさにハチミツのように甘く思われるでしょう。愛、赦し、親睦、天国…なんて心地良い響きでしょう！
ダビデ王は次のように言いました。

詩篇 **119:103** あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。

クリスチャンとして私たちは　喜びと賛美に満たされます。しかし、自分の大切な人々、友人、家族に目をやった時、私たちは　彼らのために　苦しみ、痛み、悲しみを感じ始めるのです。
私は　それを本当に経験しました。
信じることを拒む　私の大切な人々のために　私は　祈りの中で　本当に泣き叫びました。
喜びから悲しみへ、この突然の切り替わりについて、これから学びます。
8章では　全てが素晴らしかった！
しかし、この9章では　物事はそんなによくはありません。
パウロは　次のように始めています。

ローマ 9:1-2 私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。

イエスキリストが　死、埋葬、そして甦りによって示された　救いという良い知らせ、すなわち福音　を　イスラエルは国をあげて拒絶しました。その事実を　パウロは深く悲しみました。
もちろん、すべてのユダヤ人がイエスを拒絶したわけではありません。
憶えていてくださいね。使徒パウロはユダヤ人だし、弟子も皆ユダヤ人です。エルサレムで教会が誕生した時に信じた何千もの人々もユダヤ人です。
今日にもイエスキリストを救い主と信じるユダヤ人がいるように、当時も　迫害を生き抜いたクリスチャンがいました。
けれども、そのような人々は生存者にすぎず、イスラエルは　国家としては　彼らが待ち望んできた救い主を拒絶し、パウロの心を悲しませたのです。
パウロは言っています。「私は偽りを言いません」「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。」
3節でパウロは　自分の同国人への愛を　私には理解することさえ困難なやり方で　表しています。

ローマ 9:4a もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。4a 彼らはイスラエル人です。

パウロは　自分がキリストから引き離されて、のろわれた者となれればよいのに、と言っています。ギリシャ語で“Anathema”と表されますが　それは　神に呪われ、裁かれて、最後は神から永遠に引き離される、という意味です。
すごいですね！まさに愛国心ですね！　私たちはクリスチャンですが、そのうち何人が　福音を拒み、キリストを十字架につけ　クリスチャンも同じように殺そうとした人々のために　自分の永遠の救いを進んであきらめるでしょうか？
パウロが言うのは　そのようなことをした人々のことなのです。パウロは次のように言っています。

２コリント 11:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、

申命記25章で　律法は　悪事を行う者を鞭打ち40回で罰することを　許しています。
パウロの時代には　数えていなかった時のために　鞭で39回打つことになっていました。
パウロは　この鞭打ちをユダヤ人から5度も受けました。
こんなユダヤ人のために　パウロはなぜ　自分の救いをあきらめてもよいと思ったのでしょうか。
正直に言いますが、これは　私には理解する振りさえできないことです。
そして　それはそれで良いのです。なぜなら、私たちは　自分の救いを他人にあげることは不可能なのですから。
明らかに、パウロもその事は知っていました。しかし、このように表現することが　ずっと待ち望んできた救い主イエスキリストを拒絶したイスラエルの国に対する　パウロの深い愛と心配を表すために　最善だったのです。
真理に気付かず　イエスキリストを拒むことが　どういうことなのか　パウロはしっかりとわかっていました。
実際、パウロ自身かつては　クリスチャンを　そのキリスト信仰のために迫害し、死に追いやっていたパリサイ人だったのです。
おそらくパウロは　肉体的にユダヤ人であることにより　兄弟、同国人に対して　それほどまでの哀れみを持っていたのでしょう。
なぜならパウロは　彼がかつでそうであったように、ユダヤ人は真理を見ることから目をくらわませれていることを知っていたからです。
イエスもまた　自分を十字架につけた人々について　パウロと同じように理解し、彼らのために祈りました。

ルカ 23:34「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

パウロは　自分がそうであったように　ユダヤ人もまた　何をしているのか自分でわかっていない　ということを知っていました。
国家をあげて、イスラエルは　まさに自分たち自身の救い主であるイエスキリストが　死、埋葬そして復活によって示した福音　すなわち救いの良い知らせ　を拒絶しました。

さて、これよりパウロは　イスラエルが持つ強みについて言及します。それは　ユダヤ人に弁解を許しません。

ローマ 9:4b-5 子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。5 父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

このリストについて　少し説明しましょう。
まず、子とされること　とは。
イスラエル以外に　神に選ばれし人々と呼ばれる身分を持っている国はありません。
神がモーセをエジプトに戻した時、モーセは神に　次のことを言いなさいと　指示されました。

出エジプト記 4:22 そのとき、あなたはパロに言わなければならない。【主】はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。

言い換えれば　「おいパロ、お前は神の子に手を出そうとしているのだぞ。お前にとって何が良いか知っているなら　神の子を去らせた方がお前のためだ」
イスラエルのように　神の子という特別な身分と特権を持つ国は　他にありません。
次に　栄光　とは。
これは　神がおられることの　驚くべき証拠です。
イスラエルがエジプトを去った時　夜には火の柱、昼には雲が表れたことを思い出してください。
それは　神の栄光の証拠です。
それは　幕屋にも見られます。

出エジプト記 40:35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。

列王記上の8章に　ソロモンの時代にも　同じことが起こり、神の栄光が主の宮に満ちたので　祭司たちは　宮の中で立つことができなかった　と記されています。

次に　契約　とは。
神は　イスラエルの神となり、イスラエルは神の人々となる　という契約を結ばれました。
神は　アブラハム、イサク、ヤコブに　契約の土地を与えれらました。
神はモーセを通じ、イスラエルに契約の律法を与えられました。
神はダビデ王と　彼の血統から救い主が出るという契約を結ばれました。
これらの契約は　イスラエルの国に与えられました。

次に　律法を与えられること　とは。
出エジプト記20章の　十戒のことです。
最初の４つの戒めは　神と人との関係について、残りの６つの戒めは　人間同士の関係についてです。

両親を敬え、人を殺してはいけない、姦淫してはいけない、盗んではいけない、偽りの証言をしてはいけない、他の人のものを欲しがってはいけない。
この基礎を成す十戒は　神の道徳律の基準となりました。
イスラエルには　何百もの戒めが与えられました。しかし「律法」という言葉は　特に　聖書の最初の5冊の本に見られる命令をまとめたものを表し，Torahという名前がつけられました。
そしてイエスが来られ　そのすべてを　たった二つの戒めにまとめました。

マタイ 22:37-40 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』38 これがたいせつな第一の戒めです。39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。40 律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」

次に　礼拝　とは。
これは　司祭の職のことを言っていて、罪のために　設けられました。
神がイスラエルの国に　生贄の制度を設けたのは　罪のためでした。おかげで　ユダヤ人は神との関係を持つことができました。

そして、約束　とは。
神は　預言者を通して　イスラエルに多くの約束を与えられました。それには　救い主が来られるという約束と将来　神の国が来るという約束も含まれます。

最後に　5節の「父祖たち」とは　族長であるアブラハム、イサク、ヤコブ　そしてモーセとダビデ王のことです。
そして５節は次のように続きます。「またキリストも、人としては彼らから出られたのです。」

以上が　パウロのリストの説明です。
子とされること、栄光の確証、契約、律法、礼拝は全て　来るべき救い主、すなわちキリストを指示しており、キリストは来られ、死に、復活し　万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。
イスラエルの国は　救い主をこの世に案内して通すために　作られたのです。
イスラエルが神に選ばれし者であるという恵みと証拠をもってすれば　ユダヤ人が　自分たちはエリートだと思い込むのは容易でした。
「我々はユダヤ人だ！アブラハムの子、選ばれし民族、生まれながらに持つ地位のために　我々は世界中のどの民族よりも優れているのだ！」
ユダヤ人が　バプテスマのヨハネによる洗礼を受けるために　ヨルダン川に行った時のことを　たぶん、みなさんは覚えているでしょう。
バプテスマのヨハネのメッセージは次のようなものでした。

マタイ 3:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」
マタイ 3:8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。

ユダヤ教のMishnah(ミシュナ)、ユダヤ教の古代の注釈書には　こう書いてあります。「全てのユダヤ人は来るべき世界において　果たすべき任務を持つ」
自分が　来るべき世界で果たすべき任務を　生まれながらにして持っている　と思いつつ成長するなら　罪を悔い改め、実を結ぶことの意味はどこにあるのでしょう？
バプテストのヨハネは　その考え方を予測していました。　次の箇所です。

マタイ 3:9-10 『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言っておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。10 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

イスラエルの国のシンボルは　いちじくの木です。
主は　イスラエルが　実を結ぶことを願っています。
バプテストのヨハネは　斧はすでに木の根元に置かれていると言っています。その木とはイスラエルのことです。
実を結ばない木は切り倒されます。
次の章、ローマ書11:17-25でパウロは　神が　元々の枝、すなわち　不信仰なイスラエル、を切り取って、野生の枝、すなわち　異邦人のクリスチャン、を接ぎ木するかもしれない　と説明します。
そして　イスラエルが信じるなら　神はもう一度　イスラエルを接ぎ木するだろう、と続けます。
だから　人は　どこで　また　どんな宗教的影響を受けて生まれようと　救われ、神の国に入るためには　信仰によって　もう一度生まれること、信じることが必要だと　イエスは言いました。
パウロがここで説明しています。

ローマ 9:6 しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、

神の言葉と約束は　必ず果たされます。何度も何度も信じることができなかったのは　イスラエルです。
そして　徐々に　約束されていた救い主を　最終的に拒絶するに至ったのです。
パウロはこう言っています。「神様のせいにするな！自分を責めろ！」
だから「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく」とパウロは説明しているのです。
同様に、教会にくる人すべてが　キリストの体の一部かというと　そういうわけではありません。
私たちは毎日曜日　教会に行き、神の子がすることを全て行えます、しかし、それだけでは、神の子であるとは言えません。

ローマ 9:7 アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」のだからです。

アブラハムには何人の息子がいましたか？　イシュマエルとイサクの二人です。
単にアブラハムの子孫であることが　神の契約の元にいるために必要な条件であるなら、イシュマエルは　どうなるのでしょう？　彼もまた　アブラハムの息子でした。
しかし明らかに　イスラエルの国と約束された救い主を生むために選ばれるのは一人だけです。
そして、それはアブラハムの最初に生まれた息子イシュマエルではなく、7節にあるように「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」のでした。
イシュマエルは　アブラハムとサラが　神を手伝おうとした結果　サラのエジプト人のメイドだったハガルを通じて　生まれました。
つまりイシュマエルは　アブラハムとサラが　自分たちの力で神の約束を実現させようとして　生まれたのでした。
何年か後、神はイシュマエルのことをアブラハムの息子として　認めてさえいなかったことがわかります。
創世記２２：２，１２そして16で　神はイサクのことを　アブラムの一人息子と言っています。
イシュマエルは　アブラハムの血統ではあるが、神によるアブラハムの子供とは認められていませんでした。
同じように、私たちの子供はクリスチャンとして育てられますが、いつの日か自分で　イエスキリストを信じ　受け入れる必要があるのです。

ヨハネ 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

霊的な命は　肉的な誕生によって与えられるのではなく、霊的な誕生によって与えられます。
イエスがこのように言っています。

ヨハネ 3:3b「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

だからパウロはこの箇所で　真のユダヤ人と呼ばれるには　血統だけで十分ではないことを　シンプルに示しています。

ローマ 9:8-9 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。9 約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」

創世記18章で　神がアブラハムにこのことを約束したのは、アブラハムが99歳、サラが89歳の時でした。
もし神がそう言われるのなら、そうなのです。それはその通りになるのだから　私たちはそれを信じるのが最善なのです。
そして　信じることが　神の人々と呼ばれる基本なのです。
私たちは　神によって約束されていることの良いことを経験するために、信仰によって　その約束に加わることが必要です。

ローマ 9:10-12 このことだけでなく、私たちの父イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いによらず、召してくださる方によるようにと、12 「兄は弟に仕える」と彼女に告げられたのです。

リベカは　アブラハムの約束の息子イサク　の妻でした。
彼女は二人の息子を生みました。エサウとヤコブです。
彼らの文化の決まりでは、彼らの父イサクの死後、最初の息子エサウが　その家系の長の地位を継ぐべきでした。

しかし、私たちはここで　エサウとヤコブの二人が生まれる前から、彼らがなんの良いことも悪いこともしないうちから　神の約束を進め　成就させるために　神がヤコブを選んだことによって　神の主権者としての権利がいかなる文化の決まり事も、社会的期待をも　覆すことを知ります。
これは　私たちには理解しがたいかもしれません。
なぜ神は　ヤコブとエサウが生まれる前から　一人を飛び越えて　もう一人を受け入れるつもりだったのでしょうか？
その理由は　神は　誰であっても　ご自分が呼びたい者を呼び、選びたい者を選ぶからです。
神は　ヤコブとエサウが生まれる前から　二人のうちどちらかを選んでいました。
彼らが子宮の中にいる間に　神は言いました。「兄は弟に仕える」
ヤコブが大変素晴らしく、親切で寛大だったから選ばれたのだとは　誰も言えません。なぜなら　実際彼は　そうではなかったから
私は自分を見ると　正直いって　神は絶対に　（神の約束を進め　成就させるために）私を選ばなかったと言えます。だって、私はこんなに素晴らしい人間だし　悲しいことに　その通りだと言ってくれる人が　たくさんいますからね。
Charles Spurgeonが言いました。「この世の基礎ができる前に　神が私を選んでくれて　本当に良かったと思います。なぜなら　私が生まれてからだと、神は私を絶対に選ばなかったでしょうから」　私もそう思います。

神はただ　神ご自身の卓越したご意志を基に　選ぶのです。
神は　私やあなた、そして神が前もって知っていた全ての人々を選んだように　ヤコブを選びました。
神の先見の力は　私たちが　神の主権を理解しようとする判断が健全であるとわかるための　ヒントです。
神は　エサウとヤコブが生まれる前から　それぞれの心構えや応答を　あらかじめ知っていました。
神は　ヤコブが霊的性質を持ち、エサウが肉的性質を持つことを　あらかじめ知っていたので　その選択を下したのです。
神は　彼らの決断を前もって知って言いました。エサウが自分の生まれながらの権利を軽く見て　ヤコブの一杯のスープと交換すること、エサウの子孫が偽の神を礼拝し始め、イスラエルの敵となり、イスラエルに対して多くの戦いを起こすことも　知っていたのです。
神がアブラハムにした約束を見てみましょう。

創世記 12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

エサウが生まれる前から、神は　エサウの子孫がイスラエルの国を呪う者になることも　知っていました。
だから　神が預言書マラキを通して　次のように言ったのは　驚くことではありません。

ローマ 9:13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです。

これは　マラキ書１：２－３からの引用です。マラキ書というのは　旧約聖書の最後の書物で　エサウとヤコブが生きていた時から約2000年後に書かれました。
その文脈は　イスラエルに対する神の愛を　もう一度保証し　エドム人の国を拒絶する　というものです。

ローマ 9:14 それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。

あなたは　神が一方を愛し、一方を憎むのは　正しくないと思いますか？
パウロは言います。「もちろんです！」

詩編5:4あなたは悪しき事を喜ばれる神ではない。悪人はあなたのもとに身を寄せることはできない。5:5高ぶる者はあなたの目の前に立つことはできない。
あなたはすべて悪を行う者を憎まれる。

詩編11:5主は正しき者をも、悪しき者をも調べ、そのみ心は乱暴を好む者を憎まれる。

神が　エドム人の邪悪な行いを憎むのはなぜか　私はよくわかります。
神が　私自身の悪い行いを憎むのはなぜなのか　それもよくわかります。
神が　罪深いことを憎むのは　間違っているのでしょうか？　いいえ、間違っていません。
けれども　ヤコブや彼の息子たちだって、聖書を読むと　それほど正しい人々ではありませんよ、と指摘する人もいるかもしれません。
よい指摘です！　だけど　私やあなただって　同じことが言えると思いますよ。
パウロは次のように言っています。

ローマ 9:15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」と言われました。

これは出エジプト記33章からの引用です。　これは　イスラエルの民が金で作った牛を礼拝していたのを　モーセが民に代わって　神に慈悲を懇願した時の　神の答です。
神は　慈悲を乞うモーセに対して　このように答えました。「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」
私たちは誰も　慈悲を受ける値打ちなどありません、だから　神が　誰に慈悲を与えるか　選ぶのです。
つまり、人間が受ける値打ちのあるものは　慈悲ではなく　裁きでした。
そこが重要なところです。
神の　卓越した恵みなしには　だれも救われることはありません。

ローマ 3:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、

では、慈悲や哀れみには　何か根拠とか理由がひつようなのでしょうか？
いいえ、ただ　それは　与える側の特権なのです。
「おい、あいつは君の悪口を言いふらしているのに　なんであんな奴にそんなには情け深くなれるんだい？」「理由なんかありませんよ。ただそうしたいだけなんですよ。」
どんな理由であれ、哀れみを示すことが義務づけられているなら、それは哀れみではなく　義務でしょう。。

ローマ 9:16-18 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。17 聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と言っています。18 こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

パウロは　イエスを救い主として認めない　ユダヤ人のかたくなな態度に向かって話していることを忘れないでください。
パウロは言っています。神は　ご自分の約束と恵みが　続いていく順番(アブラハム、イサク、ヤコブ…)に束縛されないだけでなく、状況や　神の選ばれた道筋を軽視する人々を　適切なように　選んで　使われるのだ、と。
パウロはこのことを　イシュマエル、エサウ、パロを使って　説明しました。
ご自分の意志を成し遂げるために　反抗的で傲慢な人々の生涯さえも使う　神の卓越した力を示す例として　パロの話があります。
この話を憶えている方もいるでしょう。
モーセは　エジプトのパロのもとへ　「私の民を去らせよ」という神の言葉を携えて訪れました。しかし、次から次へと起こったのに、「パロはその心をかたくなにしました」(出エジプト記7:13, 22; 8:15, 19, 32; 9:7)
そして　次のように書いてあります。「神はパロの心をかたくなにされました」(出エジプト記9：12)
神は　パロに決断を下したのではなく、ただパロの決断をますます強くされたのです。
ローマ書１章で、パウロが人間の堕落を指摘しているところにも　見られます。

ローマ 1:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

24節　神は、彼らが自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた
26節　それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた
28節　神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた
言い換えると　「それが欲しいなら　それを与えよう」ということです。
神は理由もなしに　独断的に　人々の心をかたくなにして　回っているわけではありません。

神は私たちに　神の愛を拒む権利を与えました。そしてまた、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです
哀れみ、それとも　かたくなにされる。。。あなたはどちらがいいですか？　私は哀れみがほしいです！

ルカ18：13ー14で　イエスは　ある取税人のたとえを話しました。その取税人は　ただ　「神様、罪人の私をお許しください」と祈って　赦されました。

あなたも　もし哀れみが欲しいなら、そうお願いしてください。
「いや、別に神の哀れみなんて　いらないし！」　というなら、
では、あなたのその決断を尊重したからと言って　神を責めないでください。
イスラエルの民がついに　約束の地に定住したとき　ヨシュアが民に行ったことを見てみましょう。

ヨシュア記 **24:15** もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」

国としてのイスラエルは　歴史的に　その土地の偽の神を選び、本当の救い主であるイエスキリストを何度も拒絶し、最後は殺してしますに至ったのです。
私たちはどうでしょう？　あなたは　誰に仕えますか？
偽の神、偶像、自分の先祖に仕えますか？
自分自身？　自分の野心や　夢中になってしまうものですか？
それとも　主なる神？
「今日のこの日、自分のための　選択です」

祈りましょう。